

○研究発表 要旨

成瀬巳喜男監督『めし』をめぐる対立と同一化の運動性

黄也

成瀬巳喜男作品を論じる際、分岐点となる『めし』は、避けられない。藤本真澄の製作、林芙美子の原作、田中澄江の脚本参加、玉井正夫の撮影、中古智の美術という、のちにほぼ不動となる成瀬組の定着によって、戦前のスタイルから根本的な変化を遂げ、その後の作品群に共通する重要な要素が結集されたからだ。本発表では、先行研究を踏まえたうえで、『めし』の新しい解釈基軸を提示する。

『めし』は二人の女性、里子と三千代の家出（東京と大阪のあいだの往復する運動）を境に、前後に分割される。前半においては、この二人が初之輔（三千代の夫、里子の叔父）をめぐる対立関係として現れる。外来者・里子が三千代に取って代り、初之輔を独占しようとする。対立構図は、物語の水準にとどまらず、作品におけるすべての視覚的な要素において共通している。

しかしながら後半に入ると、逆の運動が起きている。三千代が里子の行為をあたかも模倣するかのように、あるいは映画が自己を反復するかのように、二人の同一性が顕著に可視化されてくる。例えば、里子と初之輔の近親相姦を匂わせる関係は、三千代と従兄弟・一夫のあいだにも行われていく。以上の関係性は、続編ともいえる『驟雨』における二組の夫婦のあいだでは、さらに擬似的なスワッピングとして継承されてしまう。

重要なのは、これら対立と同一化の運動性が、科白の応酬にとどまらず、直線と円形、二や四の数字などの形式によって、作品に厳密に視覚的に組織される点だ。それと同時に、編集の水準におけるディゾルヴ、サウンド・ブリッジ、空間の水準における境界領域、動作の水準における「反復とずれ」も多用される。つまり、『めし』は対立しながら同一化しているという極めて両義的な作品に間違いないだろう。

本発表ではこれらの点を考察する。

今村昌平の「重喜劇」における「インセスト」の問題

——『神々の深き欲望』をめぐる——

モルナール・レヴェンテ

今村昌平は「テーマ監督」である。すなわち今村の作品群はその時期々々において特定のトピックや主題を軸に構成されていることを示す。主題におけるそういった反復は、監督自身によって「ねばり」と呼ばれた。それは、最初の「重喜劇」とみなされる『果たしなき欲

望』(1958年)以降、今村は売春・強姦・近親相姦という3つのテーマで見られた。作品ごとに重点の置き方は異なるが、1968年までの全ての娯楽映画(『にあんちゃん』を除き)において、いずれもその主題は3つのテーマのなかから少なくとも2つ以上は選び取られているといえる。

1968年製作の『神々の深き欲望』では、近親相姦の問題が日本神話および古事記をもとにした日本の創世神話との関連で取り上げられている。本映画は沖縄における架空の島を舞台にした、太家(ふとりけ)という孤立した家族の物語である。太家に関して島では様々な噂が流行るのだが、自分の娘にまで手を出し妊娠させた家長のジャアジャ、そして長男の根吉とその姉、村長の妾でいながらノロという巫女に当たる役目をも務めているウマ子の怪しい関係を主な原因として彼らは村落共同体から疎外されている。ある日、工場をつくる目的で東京の企業から一人の技師がやってくると、神話上の「古き日本」を代表する太家は島の近代化をめざす村落共同体と激突にせざるを得なくなる。

本発表で、まず普遍的にタブーとみなされている近親相姦の問題を精神科学と人間科学・民俗学の観点から考察し、60・70年代の日本映画からみられる諸種のインセストに簡潔に触れた上で、『神々の深き欲望』において描写されている「二重のインセスト」のあり方を今村の作家性のひとつである「重喜劇」との関連で説明したい。

ジャン＝リュック・ゴダール『映画史』「3A」における「思考する形式」をめぐって ——ジョルジュ・バタイユの思想から——

松田真莉子

ゴダールの『映画史』(*Histoire(s) du cinéma*, 1988-1998)「3A」には、マネという近代絵画とともに映画が、そして「思考する形式」(*une forme qui pense*)が同時に始まったとする語りがある。そこで語られている形式と思考の関係は、あくまでゴダールの映画の内部における視覚効果によって成立するものにすぎないとされてきた(蓮實重彦, 2008)。しかし、ゴダールがこの映画の中でバタイユの『マネ』(*Manet*, 1955)を手にしながら述べる「思考する形式」は、むしろバタイユのマネ論の読解をも深めるものである。ゴダールが提示した問いを改めてバタイユのマネ論と突き合わせてみると、マネにおける思考と形式をめぐる問題は、ゴダール個人の見解などと切り捨てられるものではないことが明らかになる。

バタイユは、マネが絵画を通して「新しい形式の世界」(*un monde de formes nouvelles*)のなかへ入ってゆくことを目指したのだとしており、しかもそれはマネとともに他の者たちを「時代がその死んだ公式の中で明らかにする束縛、倦怠、偽りから」解放してくれるような世界であるという(G. Bataille, 1955)。また、バタイユはその思想において、言語が意味として機能する限界点から転落することを推進し、この運動の際限ない反復を「全体性」(*la totalité*)へ通じ得る唯一の可能性を秘めたものであるとした。彼が『マネ』のなかで描こうと試みていたのも、このような

宇宙的な連続性の世界であると言えるのではないだろうか。なぜなら、バタイユは「真の主題」が入り込むことができたものの例に、「主題を示すと同時に奪い去る」《バルコニー》の「両義性」、あるいは、他の肖像における「宙吊りの性格」、そして、《扇子をもつ女》の「両眼だけを垣間見させる扇子の骨の間」を挙げており、ここにきて『マネ』とは、形式の下に成り立つ思考の先に、新たなイメージを透かして見る (transparaître) ことを説いた著作であることが示される。このことは、ゴダールがマネの絵画を用いて提起してみせた問いを軸とし検証していくことによって、より明確なものとなるだろう。

○講演 要旨

パストラルとメロドラマ

——ハリウッド映画の表象モードを再考する——

中村秀之

現代の映画学の主要な成果の 1 つとしてメロドラマの探求を挙げることができます。ジャンルやスタイルをめぐる議論が精緻な形で刷新されただけでなく、より広範な「モード」としてメロドラマを捉え直す視点が導入され、表象の政治性に関して刺激的な問題が提起されたことは特筆すべき進展でした。しかし言うまでもなく、メロドラマ的モードですべてが理解できるわけではありません。この講演では、ハリウッド映画には別種の有力な表象モードの存在が想定できることを指摘します。手がかりとするのはイギリスの文学批評家ウィリアム・エンブソンの「牧歌 (pastoral)」の概念です。エンブソンは論集『牧歌の諸変奏』(1935 年初版)において、西洋の文学・芸術の伝統的ジャンルである「牧歌」を独自に解釈し直し、階級間の衝突をアイロニカルに描いて葛藤をはらんだ社会空間を開示する表象モードに拡張しました。本講演では、エンブソンの発想をニューディール期のハリウッド映画に適用し、パストラルとメロドラマの 2 つの表象モードが複層的に作用していたという仮説にもとづいて、この時期の作品の政治性に新たな光を当てることを試みます。

○講師紹介

中村秀之 (なかむら・ひでゆき) 氏

(立教大学 現代心理学部ホームページより)

■現職

・立教大学 現代心理学部 映像身体学科 現代心理学研究科 映像身体学専攻 教授

■専門分野

・映画研究、表象文化論

■主な研究テーマ

専門は映画研究（cinema studies）です。近年は特に、映画における身体表象の社会的形態に焦点を合せ、作品分析とその歴史的背景の調査に従事しています。この10数年間は、個人的な課題として戦後日本の劇映画の作品論に取り組みながら、並行して、戦後日本の記録映画や映画産業、さらに画面の奥行きを対象とする複数の共同研究に参加し、著書や論文を発表してきました。今後は当面、ハリウッド映画の身体表象と物語の関係をメイン・テーマに据え、歴史学・社会学・精神分析・哲学など他領域の知見も参照しながら研究を進めていく予定です。

■主な著書

- ・『特攻隊映画の系譜学 敗戦日本の哀悼劇』岩波書店、2017.3
- ・『敗者の身ぶり ポスト占領期の日本映画』岩波書店、2014.10.
- ・『瓦礫の天使たち ベンヤミンから〈映画〉の見果てぬ夢へ』せりか書房、2010.6.
- ・『映像／言説の文化社会学 フィルム・ノワールとモダニティ』岩波書店、2003.3.

■所属機関プロフィールページ

- ・立教大学 現代心理学部 (<http://cp.rikkyo.ac.jp/support/prof/nakamura.html>)